

## 〈新刊紹介〉

柳田征司著

### 『日本語の歴史 5 下 音便の千年紀』

本書は、この千数百年の日本語音韻史の上に生じた最も重大な出来事は音便だったと考える著者が、これを中心に据えることによって日本語の歴史を説明したもので、前著『日本語の歴史 5 上 音便の千年紀』（武蔵野書院、2014年：本誌 11-1, p.67で紹介）と合わせて一書をなす構成を取っている。

本書の構成は、次の通りである。「九 全国諸方言アクセントの分岐」、「一〇 二音節を単位とする韻律」、「一一 音便の進行とその問題点」、「一二 広義の撥音便と狭義の撥音便——鼻母音と撥音——」、「一三 撥音便と濁音」、「一四 撥音便とハ行音」、「一五 促音便と舌内入声音（t入声音）」、「一六 ウ音便・イ音便と長音」、「一七 イ音便の一般化による拗音の成立とエ段音・イ段音の口蓋化」、「一八 沖繩方言の口蓋化と三母音化傾向——沖繩方言の史的位置——」、「おわりに」「あとがき」。

（2015年5月10日発行 武蔵野書院刊 四六判縦組み 208頁 2,000円＋税 ISBN 978-4-8386-0457-9）

大野真男・小林隆編

### 『方言を伝える——3.11 東日本大震災被災地における取り組み——』

本書は、方言の力を活用した取り組みの支援により被災地域の方言の再興及び地域コミュニティ再生への寄与を目的として行われてきた文化庁の事業（平成24年度「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究」、平成25年度「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究事業」、平成26年度「方言活性化支援事業」）のうち、平成26年5月17日の日本語学会春季大会における「被災地の方言を伝えるために——文化庁委託事業活動報告会——」で紹介された青森・岩手・宮城・福島・茨城県域の活動内容をまとめたものである。地域コミュニティにおける方言の持つ役割を再認識し、今後の復興の取り組みにおける方言のありかたを多くの事例によって示す書である。

本書の構成は次の通り。「第一部 方言を伝えるために」には、「第一章 方言の継承における研究者の役割」、「第二章 地域の人々の方言に寄せる思い」。「第二部 伝えるために会話を記録する」には、「第三章 方言談話が伝える震災と民俗——茨城と福島の談話を中心に——」、「第四章 言語生活の記録」。「第三部 伝えるために学習材を作る」には、「第五章 方言を掘り起こす——「岩手県郷土教育資料」とその学習材化の可能性——」、「第六章 方言教科書——茨城方言テキストの作成——」。「第四部 伝えるために方言に触れる場を作る」

には、「第七章 語りの会 発信！方言の魅力——南部弁トークショー・方言で語る昔コ・津波体験紙芝居——」, 「第八章 地域の言葉で昔話を語り継ぐ活動」, 「第九章 方言教室——方言アフレコ体験ワークショップ——」。末尾にあとがき, 執筆者紹介を付す。

(2015年5月20日発行 ひつじ書房刊 四六判縦組み 283頁 1,700円+税 ISBN 978-4-89476-757-7)

今野真二著

### 『日本語学講座第10巻 言語の揺れ』

「日本語学講座」シリーズの最終巻となる本書は, これまでのシリーズ全体のまとめといえる書。「文献日本語学」の立場から, 室町時代と明治時代の文献を中心に取り上げ, 「辞書体資料／非辞書体資料」という観点も取り入れながら言語の揺れについて多面的に論じる。

本書の構成は次の通り。「序章 言語をどのように位置づけるか」, 「第一章 テキスト間にみられる「揺れ」には「第一節 実録体小説における「揺れ」, 「第二節 明治の写本」, 「第三節 手書と印刷と」。「第二章 言語の「揺れ」と連合関係」には, 「第一節 『源氏物語』青表紙本・河内本・別本の「揺れ」, 「第二節 『貴船の本地』, 「第三節 辞書の語釈」を含む。「第三章 『節用集』にみられる「揺れ」には, 「第一節 伊勢本と印度本と」, 「第二節 印度本内部の「揺れ」, 「第三節 訓の「揺れ」をどのようにとらえるか」。「第四章 明治期の辞書における「揺れ」には, 「第一節 『英和字彙』初版と再版との対照」, 「第二節 『[和英／對譯]いろは字典』初版と再版との対照」。「第五章 自筆原稿における「揺れ」には, 「第一節 夏目漱石『心』の自筆原稿」, 「第二節 稿本『言海』。末尾に, 註, あとがき, 通巻索引(作品名・人名・事項名・語句)を付す。

(2015年5月20日発行 清文堂出版刊 A5判横組み 272頁 3,500円+税 ISBN 978-4-7924-1042-1)

安田尚道著

### 『日本語数詞の歴史的研究』

本書は, 長らく日本語数詞の歴史的研究に取り組んできた著者が, これまでに雑誌や記念論文集などに発表してきた論文を集成・補訂し, さらにいくつかの新稿を加えて, 一書としたものである。

本書は, 「まえがき」, 23章からなる本文(日本語数詞のさまざまな系列, 日本語数詞の古い形, 古典語の数詞と助数詞, 日本語数詞の語源, 日本語数詞の倍数法, 個数詞, 一〇およびその倍数を表わす個数詞, 一〇〇およびその倍数を表わす個数詞, 和語数詞による端数表現, 「みそもじあまりひとつもじ」から「みそひとつもじ」へ, 『枕草子』の「ひてつくるまに」——沖縄などの方言における個数詞「ヒテツ」(1個)に関連して——, 数詞ツツの意味と語源, 日数詞, 和語数詞による暦日表現とツイタチの語源, ヒトヒ(1日)とフタヒ(2

日), 東北方言の日数詞ムヨカ(6日)——『言海』に紛れこんだ東北方言——, 人数詞, 人数を意味しないヒトリ, 唱数詞, シ(四)からヨンへ——4を表わす言い方の変遷——, シチ(七)からナナへ——漢語数詞系列におけるナナの成立——, ヨン(四)とナナ(七), 稻荷山鉄剣の「七月中」, 「あとがき」から成り, 末尾に, 詳細な索引・用例一覧・参考文献一覧・日本語数詞研究文献目録が付く。

(2015年5月20日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 576頁 13,500円+税 ISBN 978-4-8386-0285-8)

定延利之著

『私たちの日本語研究——問題のありかどと研究のあり方——』

本書は, 日本語研究を取り巻く社会や大学の状況を踏まえ, 日本語学における問題点と研究のありかたを追求した, 編者の『私たちの日本語』(2012)の続編といえる書である。様々な立場の研究者が身近な事例をもとに日本語・日本語学が直面している問題点を示すことで, 日本語研究を志す読者のための知識の習得だけでなく, 議論や研究の切り口を見出すことを目指す。

本書の構成は次の通りである。「第1課 わかりにくい表示, 説明」, 「第2課 わかりにくいことば」, 「第3課 外国語の聞き取り・日本語の聞き取り」, 「第4課 腹立たしい言い方」, 「第5課 機械に教える:対話システム」, 「第6課 母語話者に教える」, 「第7課 非母語話者に教える」, 「第8課 言語障がい者に教える」, 「第9課 危機言語」, 「第10課 危機方言」, 「第11課 電子アーカイビング」, 「第12課 日本語コーパスの構築と利用」, 「第13課 キャラクタを訳す」, 「第14課 マンガ・映画を訳す」, 「第15課 笑いを訳す」, 「第16課 同時に訳す」。末尾に索引を付す。

(2015年5月21日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 182頁 2,200円+税 ISBN 978-4-254-51046-1)

斎藤倫明・石井正彦編

『日本語語彙へのアプローチ 形態・統語・計量・歴史・対照』

本書は, 日本語文法研究の分野と比較して語彙・語彙論においては良質の研究結果の公表が少ないという現状に着目して編まれた, 日本語語彙に関する論文集である。本書の特徴は, 台湾, 韓国, 中国, アメリカ, ロシアといった様々な国籍の執筆者による日本語語彙研究を, 副題にある通り形態・統語・計量・歴史・対照のアプローチに分けて示したうえで, その枠組みに共通してみられる問題意識や分析手法を表すタグも付された点にある。こうした異なる二つのレベルから各論考を明確に位置づけ, 最新の語彙研究を紹介することにより, 語彙研究とその公表機会の活性化を目指す。

本書の構成は次の通りである。〈形態的アプローチ〉には, 斎藤倫明「複合字音語基相言類の位置づけをめぐって——漢語形容動詞語幹との関わりで—— [語種・品詞]」, 林慧君「日本語における外来語の類義接頭辞——「ミニ-」と「プチ-」の場合—— [意味・語種・コーパス]」。

〈統語的アプローチ〉には、小林英樹「漢語動詞をめぐって [意味・語種・語構成]」、秋元美晴「コロケーションから見た形容詞の装定用法と述定用法——程度名詞との関連で—— [意味・コーパス]」、陳志文「形容動詞連体形における「な／の」の選択条件について——「有名」「有限」「有数」の考察を中心として—— [教育・コーパス]」、楊淑雲「擬態語の名詞修飾について [意味・コーパス]」。〈計量的アプローチ〉には、クドヤーロワ タチアーナ「書きことばにおける略語の使用・定着とその要因——数量化理論Ⅱ類による口語性弱化の探索—— [歴史・文体]」、金愛蘭「基本語彙構造における外来語の進出領域 [歴史・コーパス]」、石井正彦「無性格語は実在するか——特化係数とその散布度による検討—— [基本語彙・文章]」、林立萍「日本昔話方面語の登場人物から窺われる庶民の生活文化 [基本語彙・文章]」、〈歴史的アプローチ〉には、百留康晴「古代日本語複合動詞における語彙性の検討 [形態・統語・意味]」、ジスク マシュー「漢字・漢文を媒介とした言語借用形式の分類と借用要因 [文字・語種・対照]」、朱京偉「蘭学資料の二字漢語とその語構成的特徴 [位相・対照]」、田中牧郎「明治後期から大正期に基本語化する語彙 [語種・コーパス]」。〈対照的アプローチ〉には、譙燕「日中両国語における偏義複合語に関する一考察 [語構成・意味]」、梁敏鎬「日本と韓国における外来語の概念とその範囲に関する提案 [表記・言語景観]」、修徳健「『ノルウェイの森』の二つの中訳本の対照に係る試論——比喩指標語を例に—— [文体・表現・コーパス]」、孫栄爽「単語単位にみる言語行動研究の有用性——「一人称複数代名詞と視線表現」の日韓対照—— [非言語表現・コーパス]」。

(2015年5月25日発行 おうふう刊 A5判横組み 316頁 3,500円+税 ISBN 978-4-273-03766-6)

吉野政治著

### 『蘭書訳述語攷叢』

本書は、蘭学者たちが用いた訳語を、これらの語が如何に旧来の思想を克服し新しい概念を伝えているのか、あるいは克服できずに旧来の思想を引きずる形でしか伝えられなかったのか、という観点から論じたものである。あわせて、重山文庫所蔵（新村出旧蔵書）の伊藤圭介宛シーボルト書翰の翻訳などを紹介する。

本書は、和泉書院研究叢書 460 として発刊された。

本書の構成は、次の通りである。「序篇 蘭書の訳述」（翻訳の文体と漢語の術語、三訳法の起源とその名称）、「第一篇 天文学・暦学のことば」（「地動説」ということば——中山茂氏説統紹——、「惑星」と「遊星」、黄道十二宮の星座名、七曜日）、「第二篇 地理学・地学のことば」（アジア州とヨーロッパ州——州か二州か——、「経・緯」——タテ・ヨコと方向——、本初子午線と東経三百六十度、「化石」の変質）、「第三篇 物理学・化学のことば」（青地林宗による時間語彙の創出、「エレキテル」から「電気」へ、七色の虹のはじまり、「元行」から「元素」へ）、「第四篇 植物学のことば」（宇田川榕菴の植物部位名の特徴、「鬚蕊・心蕊」から「雄蕊・雌蕊」へ、「歳輪」（年輪）、「幹（みき）」と「莖

(くき)」、[「研究余滴」、[「資料紹介」(重山文庫所蔵伊藤圭介宛シーボルト書翰, 重山文庫所蔵『泰西本草名疏』伊藤圭介自筆原稿, 小川友忠著『西洋時辰儀定刻活測』翻刻)。末尾に、本書で用いた蘭学関係書使用テキスト一覧・初出一覧・あとがきを付す。  
(2015年5月25日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 504頁 13,000円+税 ISBN 978-4-7576-0746-0)

渡部学著

『日本語のディスコースと意味——概念化とフレームの意味論——』

本書は、人が様々な形態的レベルの言語を用いて行うコミュニケーション活動、およびそのようなコミュニケーション活動を通して産出された1つのまとまりであるディスコースを対象に、脳神経系に起こる現象の全体像を捉えることを目指し、「概念化(言語化)」の過程を視覚化しながら言語の意味を問う書である。その際、意味記憶の仕組みの一つとして「フレーム」という概念を用い、記述と理論をまとめている。

本書の構成は次の通りである。「第1章ことばでつむぐコミュニケーション」には「1. ディスコースと言語表現」、[「2. ディスコースと言語表現」、[「3. 脳、認知、そして言語(本書の立場)」。「第2章 指示「世界」のパーツの捉え方・言語と「世界」のインターフェイス」には、「1. ことばの「指さし」、[「2. 指示性」、[「3. 指示とフレーム」、[「4. 指示と記憶」、[「5. 指示と概念化」。「第3章 事態とその概念化素材 「世界」の捉え方・「世界」の切り出し方」には、「1. 事態を描き出すための言語装置」、[「2. 事態と他動性」、[「3. 事態とフレーム」、[「4. 事態と概念者」。「第4章 接続 事態の関係の捉え方・「世界」の並べ方」には「1. 接続」、[「2. 事象の生起順を基盤とする接続」、[「3. 事象の因果関係を基盤とする接続」、[「4. 架空の世界を基盤とする接続」、[「5. 誘導推論とフレーム」、[「6. 言語化されない接続」、[「7. 共話」。「補説 脳の仕組みと働き」には「1. 脳の部位」、[「2. 脳と脳神経系」。末尾に索引、あとがきを付す。

(2015年6月10日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 328頁 4,200円+税 ISBN 978-4-874-24660-3)

武内道子著

『手続き的意味論 談話連結語の意味論と語用論』

本書は、「やはり」や「しよせん」といった語を談話連結語とし、それらを認知語用論の枠組みから論じた新しい意味論を提示する書である。言語表現のなかには発話の命題内容にかかるのではなく解釈の方向を聞き手に指示する意味に特化したものがあることを談話連結語の事例を通して論じる。

本書は、ひつじ研究叢書〈言語編〉第128巻として発刊された。

本書の構成は次の通り。「はじめに」、[「I 理論的基盤」には「第1章 関連性理論と伝達」、[「第2章 関連性理論と手続きの記号化」、[「II 関連性への意味論的制約」には「第3章 文脈含意の導出〈どうせ〉」、[「第4章 既存想定強化〈しよせん〉」、[「第

5章 共感と受容〈どうも〉, 「第6章 処理コンテキスト指示〈やはり・やっぱり〉」, 「第7章 次へ続く関係指示〈それで〉」, 「第8章 期待否認の2重の手続き〈けど〉と〈でも〉」, 「第9章 表出命題態度への制約〈ぜんぜん〉」, 「第10章 ポライトネス表明〈どうぞ〉と〈どうか〉」, 「第11章 因果関係の背景化と前景化〈から〉と〈ので〉」, 「第12章 条件節の意味論と語用論1 最小の意味論〈ば〉」, 「第13章 条件節の意味論と語用論〈れば〉, 〈たら〉, 〈なら〉はどう違うか」。末尾に「おわりに」, 「初出一覧」, 「参照文献」, 「索引」を付す。

(2015年6月12日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 320頁 7,800円+税 ISBN 978-4-89476-755-3)

常盤智子著

### 『英学会話書の研究』

本書は、英学資料の下位区分の一つである英学会話書の基礎的な研究を行い、当時の日本語の一端を明らかにすることを目的とする。第1部では、1887年までに刊行された英学会話書198書目を概観し、第2部では、リギンズ著『英和日用句集』, ラウダー著『日英会話書』, サトウ著『会話篇』に関する個別の研究を示す。

なお、本書は、博士学位論文「英学会話書による近代語研究」(2006年:東京大学)の一部に、既発表論文を加え、加筆修正を施し、まとめたものである。

本書の構成は、次の通り。「序」, 「第1部 英学会話書概観」(「第1章 英学会話書概観」, 「第2章 英学会話書一覧の分析Ⅰ」, 「第3章 英学会話書一覧の分析Ⅱ」, 「第4章 研究上の課題」), 「第2部 英学会話書の資料と研究」(「第1章 (J.リギンズ著『英和日用句集』の成立過程——『南山俗語考』との関連を中心に——」など第1~第3節)», 「第2章 (J. F. ラウダー著『日英会話書』の日本語——成立・構成・表記について——」など第1~第3節)», 「第3章 (E. M. サトウ著『会話篇』にみられる音節「エ」の表記原理——表記と音韻・音価の関わりをめぐって——」など第1~第5節)», 「結」。末尾に、後記・参考文献・使用テキスト・索引を付す。

(2015年6月20日発行 武蔵野書院刊 A5判横組み 330頁 11,500円+税 ISBN 978-4-8386-0286-5)

岸本秀樹著

### 『文法現象から捉える日本語』

本書は、日本語に観察されるいくつかの文法現象を取り上げ、それらの文法現象が類型論的な見地からどのようなステータスを持ちうるかを念頭におきつつ、それらを支配する整然とした規則性・法則性について、一般の読者にもわかりやすい形で考察を展開したものである。

本書は、開拓社の言語文化選書53として発刊された。

本書の構成は、次の通りである。「はじめに」, 「第1章 プロローグ:日本語の独自

性?」, 「第2章 二種類の自動詞」, 「第3章 所有や存在を表現する動詞」, 「第4章 場所格交替」, 「第5章 ものの受け渡しを表現する動詞」, 「第6章 品詞の認定」, 「第7章 隠された主語」, 「第8章 所有者が上昇するとき」, 「第9章 所有文の定性の制約」, 「第10章 イディオム」, 「第11章 語彙変化」, 「第12章 否定の環境で現れる表現」, 「第13章 否定の形容詞」, 「第14章 感嘆表現」, 「第15章 エピローグ」。末尾に、参考文献・索引が付く。

(2015年6月28日発行 開拓社刊 B6判横組み 224頁 1,900円+税 ISBN 978-4-7589-2553-2)

益岡隆志編

### 『日本語研究とその可能性』

本書は、日本言語学会2013年秋季大会(第147回大会)シンポジウムの企画「日本語研究とその可能性」の発題を中心として編まれた論集である。日本語研究における分野の細分化と研究の個別化に警鐘を鳴らし、日本語研究の異なる分野・アプローチ間の対話・交流と、日本語研究の国際化のありかたを問うことを目指したものである。シンポジウムにかかわる6つの論考を第I部に、分野間の対話と日本語研究の国際化に関する論考を第II部にまとめた2部構成をとる。

「第I部 日本語研究の3つの分野——音韻・語彙/レキシコン・文法を対象に——」には、高山知明「第1章 連濁と濁音始まりの付属形式——個別言語研究の意義——」、田中伸一「第2章 有声性の強さから見た日本語の不透明現象——濁りの表示による透明化——」、斎藤倫明「第3章 複合字音語基分類再考——「語種」の観点から——」、由本陽子「第4章 「名詞+動詞」複合語の統語範疇と意味のカテゴリー」、野田尚史「第5章 世界の言語研究に貢献できる日本語文法研究とその可能性——「する」言語と「なる」言語、高コンテキスト言語と低コンテキスト言語の再検討を中心に——」、堀江薫「第6章 日本語の「非終止形述語」文末形式のタイポロジー——他言語との比較を通じて——」。「第II部 多様な可能性——2つのテーマを対象に——」には、山口治彦「第7章 「城の崎にて」を読む——語りの構造と描写のストラテジー——」、森山卓郎「第8章 日本語の韻文文学の表現と文法」、遠藤喜雄「第9章 日本語研究の海外発信:副詞節の事例研究」、小林隆「第10章 東北方言の特質——言語的発想法の視点から——」。末尾に編者・執筆者紹介を付す。

(2015年6月28日発行 開拓社刊 A5判横組み 288頁 3,200円+税 ISBN 978-4-7589-2214-2)

澤田治美編

### 『意味の社会性 付録目次・総索引』

本書を含むひつじ意味論講座では、ことばの意味を同心円的に捉え、「命題の意味」「モダリティの意味」「発話場面的意味」「社会・文化的意味」という4つのレベルに区分して意味の問題に迫る。そのシリーズ最終巻となる本書は、意味を捉える同心円の最



も外側に位置する「社会・文化的意味」をテーマにし、社会システム、言説、呼称、ジェンダー、翻訳、精神分析、医療、司法、異文化コミュニケーション、教育、災害、スポーツといった多様な視点から社会における言語使用の諸問題を取り上げた論集である。

本書の構成は次の通りである。山口節郎「1. 社会システムと意味」、亘明志「2. 記号論と社会学」、児玉徳美「3. 意味分析の拡大に向けて」、堀井令以知「4. 呼称・人称と社会」、リリアン テルミ ハタノ「5. 日本社会における在日外国人の本名と通名の意味」、クレア・マリィ「6. 言語とジェンダー」、影浦峯「7. 翻訳の社会的意味」、北山修「8. 国語の共有と解釈すること 国語発想論的解釈」、野呂幾久子「9. 医療コミュニケーションと医療コミュニケーション研究」、堀田秀吾「10. 司法の場における言語使用」、名嶋義直「11. 災害とコミュニケーション」、東海林祐子「12. 選手とコーチ間のコミュニケーションに関する一考察」、森山卓郎「13. 「断り」の意味論と国語教育」。末尾に、「ひつじ意味論講座 総目次」、「ひつじ意味論講座 総索引」、執筆者紹介を付す。

(2015年7月21日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 316頁 3,200円+税 ISBN 978-4-89476-507-8)